



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	果菜類育苗の必要性 (3)
Author(s)	友寄, 長重
Citation	琉大農家便り(25): 8-9
Issue Date	1957-12
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19800
Rights	

果菜類育苗の必要性

(三)

一群の醸造材料の発酵を見計らい、一月一九日ナスの品種中性橋真五(〇)粒、久留米長ナス五(〇)粒、長へちマ種及び短へちマ種夫々一〇粒ずつ各鉢に播種した。ナスの育苗成績は次の通りである。

播種一ヶ月後の二月一九日前回の九つの鉢を三群と三組に分けて次の通り処理した。

組	(1) 昼夜硝子区	(2) 昼間硝子区	(3) 無処理区
(1) 群	1	4	7
(2) 材料区	2	5	8
(2) 床土	3	6	9
(3) 絶縁区			
(3) 無処理区			

即ち各種は前回と同様に処理し(1)組は昼夜共高温を保つようにし、(2)組は夜間は硝子を開放していわゆる夜冷育苗することを目的とした。之等の各鉢に前回播種床で育てた苗を次の第六、七表での試験のために仮植した。一ヶ月後の三月十九日第六表の通りの組合わせにより育苗された苗八十一本取出して測定した生體重を次の通り統計処理した。

以上の実験から育苗中の加温、保温の効果は顕著で、苗の生育に著しい効果を与えた。

即ち無硝子区は硝子区に比し、発芽始めまでに四日後れ、発芽揃いまでに八日も後れた。播種一ヶ月後の生體重間には明らかに有意な差が認められた。

まことの有無に關してはまことの操作が不恰利であったが差は判然と認められた。群間ではガラス硝子下の醸造物踏込の効果はけんきよで、わらを床土下に入れて吸収された太陽熱が床土下に移行するのを防ぐようにした時の効果も明らかである。

更に夜冷育苗の効果を見るために各鉢から両品種共六本ずつ播種床C及びDで育苗した。定植して生育及び開花、結果状態を調査して第七表の成績を得た。

	1月19日 2月19日 午前10時		播種後		播種1ヶ月後9本平均			
	平均 気温	平均 地温	発芽 始日 の数	発芽 揃日 の数	展開 本葉 数	草 丈	莖 直径	生 態 重
A	23.2	23.8	7	11	3	3.6	2mm	0.609
B	21.0	20.8	9	13	2	2.8	1.2	0.22
C	20.4	20.6	11	16	2	2.4	1.2	0.20
D	23.1	23.2	8	12	2.5	2.5	1.1	0.30
E	21.0	20.4	9	14	1.5	1.5	1.1	0.16
F	19.5	19.6	12	17	1.5	1.7	1.1	0.15
G	16.8	17.7	13	21	0	1.4	1.0	0.08
H	16.5	16.8	14	22	0	1.2	0.9	0.07
I	16.4	16.0	15	22	0	1.1	0.9	0.06

第五表 温度とナスの発芽及び生育状態 (1月19日播種、品種中生橋真)

	播種床各区									平均	
	A	B	C	D	E	F	G	H	I		
移 植 床 各 区	1	11.1	0.1	5.0	8.2	4.5	2.7	2.1	1.9	1.8	5.27
	2	7.3	3.7	2.2	7.0	3.0	1.5	1.7	1.7	1.7	3.31
	3	5.9	3.6	2.4	2.9	2.4	3.5	2.9	1.7	1.6	2.97
	4	7.6	4.0	4.5	7.3	3.9	3.3	1.9	1.5	1.4	3.93
	5	6.5	2.9	2.7	2.8	2.3	2.2	1.5	1.4	1.0	2.55
	6	5.6	2.3	2.1	2.2	1.8	1.6	1.4	1.4	0.6	2.12
	7	2.8	1.1	0.9	3.4	1.9	1.9	1.6	0.6	0.4	1.62
	8	2.4	1.7	0.8	3.3	1.0	0.5	0.4	0.3	0.2	1.18
	9	1.7	1.0	0.3	0.9	1.1	0.3	0.3	0.3	0.3	0.69
平均	5.66	3.40	2.32	4.22	2.43	1.95	1.51	1.20	1.00	2.64	

LSD (east significant difference) 最小有意差
播種床及び移植床各区間共 5%...0.14 1%...0.18

第六表 育苗方法による茄中生橋真苗の生育の相違(1月19日播種、2月19日仮植3月19日測定、各数字は1本の苗の生體重グラム)

上表によるとやはり保温、加温の効果はけんちよで、4から9までの各区では明らかにこの事が表われている。1、2、3区

	中生橋真				久留米長茄子			
	定植時の草丈	定植1ヵ月後の草丈	5月13日の開花数	5月13日の着果数	定植時の草丈	定植1ヵ月後の草丈	6月17日の開花数	6月17日の着果数
1	13.6cm	22.0寸	8.5	3.0	12.9cm	11.7寸	7.9	2.7
2	11.2	19.3	5.0	4.3	11.0	14.3	6.7	4.5
3	10.8	18.1	4.5	4.0	10.5	14.2	6.8	2.6
4	13.2	20.8	10.2	4.7	12.7	14.6	9.0	5.2
5	9.5	17.5	9.0	4.2	10.2	14.3	6.6	4.8
6	8.1	15.7	8.3	3.5	9.3	12.7	6.2	5.0
7	9.8	17.1	7.6	4.2	9.9	13.3	7.4	2.3
8	8.8	15.2	7.4	4.0	8.3	12.7	8.2	1.8
9	9.2	14.0	6.3	2.5	7.5	12.5	6.5	1.5

第七表 育苗方法の相違による定植後の茄の生育開花及び結果予備試験成績 (1月19日播種、6本の平均植果は中生橋真3寸大久留米長茄子6寸大の時収穫)

のものが、3、4、5区のものに劣るのは二つの理由が考えられる。第一に定植前根回しをしなかったため、大苗の活着力が悪かった。この事は久留米長ナスの1、2区の定植一ヵ月後の丈が3、4区のものに劣る事に明らかに表われている。

第二に昼夜高温区は夜冷育苗区に開花数着花率共に劣る事で、夜冷育苗も効果がいちよであると考えられる。なお第一の理由と関連して、1、2、3区では定植の時の断根が滅数分裂期にあった花の質を低下させたとも考えられる。又2等の区は硬化も行われておらず、この点でも活着に不利であったであろう。

へチマの育苗では種子の発芽率が低く、精密な試験は不可能であったが、A、D鉢では九日目、F鉢では十日目に発芽始めとなった。何れも二日後には発芽揃いとなったが、ナスの場合と同様に生育は著しく異った。G、H、J鉢の苗は播種二十日後に至って芽を切り、一ヵ月後に至るも軸は伸びなかった。以上の結論として沖繩で、一二月に高温に保ち、後期のナスの育苗では夜冷育苗するのが良いと考えられる。

五、むすび

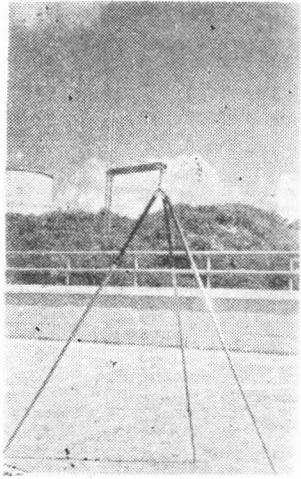
今後のそさい栽培は国民保健の見地から最も栄養、ビタミン類の生産力の高いものを、労力、資材、輸送関係等とも考え合わせて選択し、輸送関係の合理化を計らなければならない。そのためには食生活の改善に相まって、栄養的価値の割合少ない果菜類の生産量を限定すると同時に、圃場使用期間に比して収穫期間を長くする様に生産計画を樹てねばならない。先ず六月中旬からの高温期と台風期前に果菜類の生産を打切る事を前提として、それまでの収穫期間を長くするために、出来るだけ早くから育苗して、大苗を定植しなければならぬ。かくする事により、草丈の高い四、五月に出荷する事が出来、又この期間の出荷量が多くなれば六、七月に草丈が急激に下落する事も防げるようになる。

育苗の方法には露地、冷床、温床育苗の方法があるが、此処では温床育苗の利点について述べた。

また早くから育苗する事が可能であるが、この場合には労力は少なくて済むが、苗床を長期間使用する事になる。集約栽培では矢張り温床育苗が必要である。この場合は夜冷育苗根回しは重要な作業である。(元) (友寄長重)

可変半徑プロット法による
林分材積測定法について
(4)

七、扇田助教の測定期について
今まで木梨助教が林技官の考案されたものについて述べてきたのであるが、更に本誌の長さを短くし(二五cm)静置出来るように脚を取付け傾斜地においても測定の手数を省くことが出来るように考案されたものが東大扇田助教の測定器であつて第13図の如き構造をしている。



第 13 図

即ち、三脚に二五cmの長さの測桿を取付け(測桿には水準器があつて水平に静置される)測桿の先端に上下二〇cmのスリットがつけられるようになっておりこの中が三段階に(一)cm、〇・七五cm、〇・五cm)調節されるように考案される。

一、測ろうとする林分の面積
この方法では林分の平均一ha当りの断面積合計を算出するのであるから対象となる面積は何百町歩でもよいわけだが林分